

2023 年度・総合研究所研究チーム中間報告書

研究代表者（所属・職名・氏名）

経営学部・教授・北居 明

① 研究課題 組織における道徳の不活性化の研究

② 研究期間 2023 年度～2024 年度

③ 研究メンバー 経営学部・教授 北居 明

文学部・教授 大西 彩子

④ 研究成果および実績の概要（1200～1600 字程度）

本研究の目的は、日本の組織において道徳の不活性化が発生するメカニズムを探求し、これを予防するための方策を検討することにある。道徳の不活性化とは、道徳的制御機能を不活性化させる心理的メカニズムである。多くの非倫理的行動や不祥事の背景には、道徳の不活性化があると言われている。まず、道徳の不活性化に関する既存研究を渉猟し、これまでの研究蓄積について整理する作業を行なう。ここでの主な目的は、道徳の不活性化概念の明確化と操作化である。これを通じ、研究に必要な尺度開発ならびに仮説モデルの設定を行なう。そのうえで、アンケートやインタビュー調査を行い、道徳の不活性化にいたるメカニズムおよびその影響について調査・分析を行う。ここでの分析を通じ、組織における道徳の不活性化を促進するあるいは抑制する個人的・組織的要因を明らかにすることを試みる。

2023 年度は、文献の渉猟を通じ、研究に必要な尺度開発ならびに仮説モデルの設定、アンケート調査を通じたデータ収集と分析を行った。われわれの調査で用いた主要な変数は、組織における道徳の不活性化、道徳的アイデンティティ、および非倫理的向組織行動と非倫理的向組織行動に対する罪悪感と恥の感覚、ボトムライン・メンタリティ、エンパワーメント・リーダーシップ、および関係性攻撃である。このうち、道徳の不活性化は既存研究で開発された尺度について文言をより分かりやすく修正したものを用いた。非倫理的向組織行動に対する罪悪感と恥の感覚の尺度は、今回の研究のためにわれわれが既存研究をもとに作成した。データは、インターネット調査会社を通じ、全国から 2000 サンプル（男女それぞれ 1000 名ずつ）を収集した。

まず、われわれは仮説モデルとして、道徳的アイデンティティが道徳の不活性化を媒介して、非倫理的向組織行動に対する罪悪感や恥の感覚に影響するモデルを設定し、分析を試みた。その結果、道徳的アイデンティティの内面化が道徳の不活性化を抑制することを通じ、罪悪感と恥の感覚を高める影響が得られた。道徳的アイデンティティの内面化は、罪悪感と恥を直接高める効果も見られた。一方、道徳的アイデンティティの象徴化は、道徳の不活性化をむしろ促進する効果が見られた。すなわち、自分が道徳的な人間であることを個人の信条として重要視する場合、道徳の不活性化は抑制されるため、一見組織のためになるように見える非倫理的行動に対して罪悪感や恥の感覚を抱く傾向があると考えられる。一方、自分が道徳的な人間であるように周りから見られることを重視する場合、道徳の不活性化はむしろ促進されることが示唆された。

道徳的アイデンティティの二つの側面が、道徳の不活性化に対して異なる影響を与えるという今回の分析結果は、先行研究でも見られないユニークな結果である。また、道徳の不活性化が非倫理的行動に対する罪悪感や恥の感覚を生み出すことは、先行研究で主張はされていたものの、国内で

実際に確かめられたことはなかった。本研究では、道徳の不活性化が罪悪感や恥の感覚に関連していることが経験的に確認された。このように、現段階において本研究は、理論的および実践的な示唆に富む研究結果を得ることができている。ただし、データ分析はまだ初期段階であり、今後道徳の不活性化と他の変数との関連について、さらなる分析が進められる予定である。

⑤ 今後の研究推進方策（継続の場合）

前述のように、道徳の不活性化と他の変数との分析をさらに進める必要がある。また、今回のアンケートでは、主に個人レベルの変数を中心に調査を行ったが、道徳の不活性化には職場や組織レベルの要因（例えばリーダーシップや組織風土など）も影響していると考えられる。こうした文脈的要因と道徳の不活性化の関係についても、調査・分析を進めていきたいと考えている。

⑥ 研究発表

本研究の現時点における研究成果は、2024年度経営行動科学学会年次大会（2024年11月）にて発表の予定である。また、さらなる分析を通じ、来年度の社会心理学会にて新たな研究結果を発表する予定である。

⑦ 研究成果による産業財産権の出願・取得状況

予定なし。

⑧ 予定している研究成果の公開方法（研究叢書の公刊、学術雑誌投稿など）

現在のところ具体的な予定はないが、学術雑誌への投稿は行いたいと考えている。